

Title	<書評論文>子どもの歴史社会学的研究：アクター・ネットワーク理論からのアプローチ
Author(s)	姚, 逸葦
Citation	京都社会学年報：KJS = Kyoto journal of sociology (2013), 21: 105-113
Issue Date	2013-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/192748
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

〈書評論文〉

子どもの歴史社会学的研究

—— アクター・ネットワーク理論からのアプローチ ——

André Turmel,
*A Historical Sociology of Childhood:
 Developmental Thinking, Categorization, and Graphic
 Visualization*
 (Cambridge University Press, 2008)

姚 逸 葦

1 はじめに

近代への移行に伴い、子どもは日常生活に欠かせない要素になった (Ariès 1960=1973: 379)。ただし、国の人口政策のために子どもを確定的に捉える必要があった反面、子どもは身体的な面でも精神的な面でも捉えがたい「不確定的な」存在だったので、その捉えかたが社会問題になった (p. 8)。その問題への対応として、子どもを捉える科学と技術が要請された。18世紀あたりまでは親子のつながりは私的なものだったが、19世紀以降の技術の発展によって、科学に媒介された関係に変容した (p. 53)。

本書によれば、19世紀の後半から20世紀の中葉に至るまでの間に、「ノーマルな」子ども ('normal' child) ⁽¹⁾ の概念、および「発達の思考」(developmental thinking) が世に問われた。それらの概念と理論は、現在にいたるまで小児科医、心理学者、児童福祉機関によって使用され、巨大な影響力を持っている。しかし、より具体的に言って、この百年の間に「ノーマルな」子どもと「発達の思考」は、子どもを評価する基準として、どのよ

⁽¹⁾ 'normal' child という概念について、著者本人は特に説明をしていない。しかし、本書の第四章によれば、normal には三つの意味が含まれている。それ故に、ここでは日本語に訳さずに、カタカナで「ノーマルな」子どもと表記する。具体的な内容は、本稿の2-3節で詳しく説明される。

うに専門家、親、公権力に受け入れられてきたのか。そして、もともと一人ひとり個性を持っている子どもは、どのように一定の基準で数値化され、類型化され、最終に「発達の思考」に捉えられたのか。アンドレー・デュルメーは、2008年に発表した本書において、以上の疑問に答えている。

以下、第二節では、本書における議論の順序を再構成して、子どもの測定技術の発展、および「子どもをめぐる集合体」の形成という二つの側面から本書の内容をまとめる。第三節では、本書をフィリップ・アリエスによる子どもの歴史社会学的研究と比較して、本書の理論枠組みと、本書が考察の対象とする時代の特徴を論じる。

2 本書の構成

本書は、五つの章によって構成されている。第一章において、社会学の子どもへの見方が考察され、本書全体の理論枠組みが紹介される。第二章から第五章までの四つの章は、子どもの測定技術が発展する過程、および「ノーマルな」子どもという概念と「発達の思考」が普遍的に受け入れられる過程という、二つの過程への考察に分けられる。

2-1 ANTの視点から

著者によれば、子どもは長い間社会学において見落とされ、「捉えられないモノ」(unthinkable object)とされていた(p. 17)。このような状況に至った原因は、19世紀後半から形成された社会学と心理学の分業である。つまり、心理学が子どもと幼年期を研究対象として、社会学が子どもの所属する社会組織と共同体だけを考察するという傾向である(pp. 18-9)。この分業は二つの結果をもたらした。ひとつは、エミール・デュルケーム、ピエール・ブルデュー、タルコット・パーソンズなどの社会学者が、児童心理学の観点を社会学の基本的な仮定として無批判的に受け入れたことである。もうひとつは、社会学が児童心理学に基づいて、「社会化」の概念を創出したことである。社会化の概念によって、子どもの成長は、強制、教育、しつけ、統制などの方法を通じて、幼年期から成人期へ移行する過程とみなされるようになった(p. 19)。しかし、社会学における社会化は「ブラックボックス」であり、内部の複雑な機構は注目されなかった。それ故に、社会化に関する理論は、子どもに焦点をあてず、むしろ子どもにかかわる家族などの社会組織を中心としたものになった(p. 20)。社会化の概念のもとで子どもを捉えることに対しては、子どもを受動的・非合理的な存在としてあらかじめ規定してしまうという問題が指摘されてきた(p. 22)。しかし、こうした子どもの位置づけは、あくまで歴史的に形成されてきたもので

ある。子どもを社会的に捉えるには、子どもの性質をあらかじめ規定するのではなく、子どもがそのように規定されるようになったのはいかにしてか、ということ进行分析できる枠組みが必要である。本書はこうした問題意識から、アクター・ネットワーク理論 (ANT) を子どもの社会学的研究に導入し、子どもという対象を捉え直すことを試みる。

ANT はさまざまな二分法の枠組みを棄却し、社会を平等かつ対称的なアクターによって構成されたハイブリッドとみなす (p. 46)。アクターは人間に限られるわけではなく、子どもか成人か、生命体か無機体かを問わず、あらゆる関与者が平等な地位を持つものとみなされる。そして、誰が (あるいは何が) 主体性、あるいは行為者性 (agency) を持つかは、それらアクターの関係のなかで決まるとされる。伝統的な社会学理論において、社会が「構造」、すなわち階層やヒエラルキーによって理解される (p. 40) のに対して、ANT はそのような構造を想定せず、流動的なネットワークの変化によって社会の変動を捉える。そして、異質なアクターを集合体 (collective) として接続させる上で、「技術の翻訳」 (technical translation) が不可欠な役割を果たす。翻訳とは、ある技術を媒介することで、それまで存在しなかったアクター間の結び付きが創造されたり、もともとあった関係が変化させられたりする過程を指す。それ以前には別々のものであった利害関心を結び合わせ、単独の目標を作り出すことで (Latour 1999=2007: 111, 230)、異質なアクターを一つの集合体として接続させるのである。ANT では各アクターの性質は他のアクターとの関係で決まるとされているため、このようなネットワークの更新にもなって各アクターの性質も変化すると考えられる。「受動的・非合理的」な子どもの性質も、こうした技術によって媒介されたネットワークの産物である、というのが本書の基本的な主張なのである。そして、著者が「子どもをめぐる集合体」 (childhood collective) ⁽²⁾ と呼ぶこのネットワークの成立における技術の役割が、重要な分析対象となる。そこで、著者は ANT の基本的な考えを五点にまとめた上で (pp. 46-7)、そのうち「技術の媒介」と「対称性」の二つに着目し、それらにやや修正を加えて本書で用いている。

まず技術の媒介について、著者は、伝統的な社会学理論は「非人間的モノ」 (non-human object) および人工物を残余的な対象としてしか扱ってこなかったという (p. 42)。しかし 20 世紀になって、非人間的モノは、社会関係のネットワークを維持したり、変動させたり、安定化させたりするのに不可欠な要素になった。モノはもはや、社会関係を成立させる上

⁽²⁾ この collective の意味について、デュルメイはここで特に説明を加えていない。ANT の代表者の一人、ブルーノ・ラトゥールの解説によれば、collective という概念は「人間と非・人間の関連」ということである。すなわち、集合体において、構成者が単に人間のみを含んでおらず、非・人間も「集合体のなかの一人前のアクター」として、「人間とともに巻き込まれている」 (Latour 1999=2007: 224, 400)。

で人間に劣らぬ重要性を持ったアクターなのである (pp. 48-9)。

一方、「対称性」という考えによって、子どもにせよ、大人にせよ、すべてのアクターは同一の視点ないし概念枠組みに基づいて考察される (p. 53)。前述のとおり、伝統的社会学理論は、子どもを「前社会的」(pre-social) とみなし、成熟していて理性的な成人と対置する (p. 53)。しかし、たとえば子どもによる暴力や殺人といった事件をめぐる議論に見られるように、「無垢な子ども」のような考えは揺るがされることがある。そのような事件を「悪いしつけ」や「混乱した環境」によって説明するとしても、よいしつけや環境の基準自体も争議的である (p. 57)。子どもや成人の性質を固定的に捉えるのではなく、それらの性質が変化していくという現実を見据えることで、子どもを脱周縁化 (p. 58) できることが、著者の考える ANT の強みである。

2-2 子どもの測定技術の発展

子どもの測定技術の発展は、主に三つの段階に分けられる。第一の段階は、身長や体重などの身体的特徴を測定する段階である。19世紀前半までは、子どもの観察といえば、18世紀の哲学者によるそれを除けば、各家庭でオリジナルな方法で行われていた細心の観察および記述くらいしかなかった (p. 91)。その後、子どもを観察・記録する技術は、公衆衛生、小児医学、心理学などの専門領域で生み出される、表やグラフやチャートにおいて標準化され、徐々に複雑なものになる。「身長・体重・年齢対照表」(height-weight-age table) や「発達記録表」(developmental record form) などが、その時期の標準化された観察・記録ツールの典型的な例として知られている (p. 129, 153)。

第二は、子どもの知能と精神を測定する段階である。乳幼児死亡率の低下および児童心理学の発展に伴い、測定対象は身体的特徴から認知能力などの精神的特徴へと拡張された。子どもの身体測定技術が活用されたのと同じ時期から、児童心理学者は精神を測定する技術の開発に着手していたが、1920年代までは、精神的特徴の測定をめぐる議論は、学術誌などの学術領域の内部で行われていた。そこでのアーノルド・ゲゼルたちによる研究手法の洗練に伴って、IQテストをはじめとする知能と精神の測定技術が脚光を浴びるようになった (pp. 161-73)。

第三は、子どもの行動、特に問題行動を測定する段階である。1920、30年代において、非行少年はもはや悪い家庭環境または社会環境の「被害者」ではなく、「不適応児童」として予防介入の対象となった (pp. 173-4, 241)。それ以降、子どもや生徒の問題行動の発生と頻度を記録する「問題行動記録表」が使用されるようになる。そして、問題児を矯正する技術も「少年指導クリニック」(child-guidance clinic) において創出されていく。著

者によると、「子どもに関する科学的発見が新しい技術装置を生んだ。そして、それらの技術装置が自身を生み出した知識をいっそう発展させた」(p. 308)。

2-3 子どもの類型化

統計的な考え方の普及に従い、「ノーマルな」子どもという概念が形成された。著者によれば、この「ノーマル」という概念には、三つの意味が含まれる。即ち、「平均的な」(average)、「健康な」(healthy)、「問題のない」(acceptable) という意味である (p. 182)。

まずは、「平均的」という意味の「ノーマル」である。アドルフ・ケトレはピエール＝シモン・ラプラスとカール・フリードリヒ・ガウスによって発見された正規分布を社会科学の領域に導入して、「平均人」(l'homme moyen) という概念を提唱した。「平均人」とは、すべての特徴が平均値にある想像上の個体を指す (pp. 186-7)。この考え方に基づいて、身長、体重、知能などをパラメータにして子どもを測定すれば、人間の成熟および成長の基準が得られ、「ノーマル」と「サブノーマル」という二つの類型に区分することができる (p. 217)。

次は「健康」という意味の「ノーマル」である。「平均」としての「ノーマル」の概念が確立された時期に、医師や公衆衛生学者は、平均から外れた子どもの成長プロセスの原因には病気があると認識し始めていた。こうして、病気や疾病は「ノーマル」に対置される (p. 217)。「病的な」という概念は従来、質的な意味で「健康」の対概念であったが、統計的思考の普及によって、これが量的な意味で、正常な範囲からの逸脱と捉えられるようになった (p. 190)。そして、この枠組みに基づいて、子どもが「健康的な」児童および「病的な」児童という二つの類型に分けられた (p. 218)。

最後は「問題のない」という意味の「ノーマル」である。前述のとおり、病気は児童の成長の障害と認識されたが、それは単に疾病という状態に限定されず、しばしば問題行動も含むことがほめかされていた (p. 235)。こうして、少年非行を扱う際に、たんに家庭教育や社会環境を責めるだけではなく、子ども自身の要因が考慮されるようになった。これに伴って、非行少年を被害者と見なす従来のまなごしは、精神科医の介入によって弱い立場に追いやられた (p. 244)。この枠組みに基づいて、子どもが「問題のない者」と「逸脱者」に分かれるようになる。

2-4 「子どもをめぐる集合体」の形成

「子どもをめぐる集合体」に所属するアクターは、子どもの測定技術、およびその技術

を支える統計学的思考によって結びつけられている。ただし、集合体のアクターに受け入れられるためには、生データは測定技術や視覚的表現といった専門家以外にも利用可能な形で表現される必要がある。それ故、児童の測定技術は、子どもの身体、精神、行為、知能を観察・測定する技術のみならず、そうして得られたデータを視覚化させる技術をも含んでいた。

子どもを測定する技術の基礎は統計学である。統計学的な考え方の社会への応用は最初に人口学から始まったものである。統計学的な考え方は社会の基礎的地位を占めており(p. 183)、社会の成員は、自身が望むと望まざるとにかかわらず、統計学的な考え方、およびこの考え方に基づく「ノーマルな」子どもという区分の枠組みを受け入れ、「子どもの集合体」に巻き込まれることとなった。

家族、公衆衛生、医学と心理学といった領域の成員が「子どもをめぐる集合体」に巻き込まれたのは、主に子どもの健康診断と育児への規制を通してである。どちらにおいても、児童の身体のみならず、精神的健康も重要視されていた。19世紀後半から、母子健康手帳、発達記録表、IQテストなどの標準化された記録ツールが広範囲に使用されるようになった。これらの技術に基づいて、「ノーマル」を健康とみなす「健全-不健全」の枠組みによって子どもが評価され、規制された。

社会改革者、学校、少年裁判所などの公権力の領域においては、子どもの行為が「問題行動記録表」などの技術で記録され、評価され、「問題のない」という意味での「ノーマル」という枠組みに基づいて「問題のない者」と「問題児」に区分された。問題行動を繰り返す子どもを特殊な学校や福祉機関に送り、規制するようになった。

しかし、「子どもをめぐる集合体」に共有されたのは、子どもを観察して記録する技術、および「平均-平均外」、「健康-不健康」、「問題のない-問題のある」などの静的な枠組みだけではなく、子どもを一連の発達段階をたどるものとみなす、時系列的で動的な枠組みも、この時期に共有された重要な考えだったのである。

2-5 発達の思考の定着

著者は、19世紀後半から20世紀前半に見られた単線的な発展・発達の捉え方を、「発達の思考」と呼んでいる(p. 2)⁽³⁾。ここまでに見てきた各種の観察・測定技術により、子どもの理解、そして子どもをめぐる実践の枠組みとして発達の思考が確立され、子ども

⁽³⁾ 著者によればこれは、発達心理学だけでなく、社会の発展などにも適用されていた考え方であり、その意味では「発達の思考」と訳すのはミスリーディングであるが、本書では子どもの成長が主なトピックであるので、「発達の」と訳す。

についての文化的に正統な考えおよび方法として受け入れられていった (pp. 262-3)。このような枠組みは、アクターの間にもどのように定着したのだろうか。

19世紀までに、子どもの身体の成長は、子どもの死亡に不安を抱える成人の関心の焦点になった。そして、多様な「成長チャート」の使用に伴い、成熟した人間へ発達するプロセスが視覚的に表現できるようになっていった。公権力は本格的に幼児死亡率を減少させるために、衛生状態を改善し、栄養状況を向上させ、伝染病対策をおこなった。以上の作為が直接的に、または間接的に死亡率を減少させた (p. 251)。しかし、児童死亡率の低減は子どもが安定的な存在になる条件の一つに過ぎない。それ以外に、児童を認識するために、標準化され安定した認識の枠組みも不可欠であった。

子どもをグループに分けて比較し、児童全体に関する成長段階モデルを構築するというアイデアが誕生した。この考案が発達の思考の基本原理をつくった (pp. 251-2)。そして、子どもをめぐる集合体が児童を類型化させるプロセスにおいて、読みやすさと討論しやすさを特徴とする発達の視覚化装置として、年齢階級構造 (age-grading structuration) の枠組みが採用された (p. 255)。のちに、この枠組みが体系的な身体検査、食事の栄養基準、IQテストなどの子ども測定技術に使用され、子どもをめぐる集合体に受け入れられ、文化的に正統な認知形態となった。ゲゼルの児童心理学には、発達の思考の考えが顕著に見られる。この思考のもとでは、身体の成長と精神の成長がともに、一連の段階を踏んで成熟していくプロセスとみなされる。こうして、年齢、発達段階、発達の順序といった枠組みで捉えられた発達の理論が、集合体に完全に受け入れられた。あらゆるアクターが、子どもはある一連の順序に従って成長するものだ、という考えにもとづいて行動するようになった (p. 301)。

3 考察

ANTの手法を使ったこの「子どもの歴史社会学的研究」には、歴史社会学の性格も科学社会学の性格もかなり濃厚である。本節では、アリエスの『〈子供〉の誕生』(Ariès 1960=1973)との比較によって、本書の特徴を考察しよう。

3-1 ANTを用いた歴史社会学的研究の特徴

アナル派史学の代表作である『〈子供〉の誕生』の中で、アリエスは、人々の観念および社会構造の転換によって「子ども」という概念がどのように構築されたのかという問題について、15世紀から19世紀にかけての子どもに対するまなざしの変化、および家族

構造の変化を考察した。アリエスによれば、中世までは、子どもは家族の中で可愛がられ、家庭と学校で文明的で理性的な習俗を学んでいたが、大人と区別されてはいなかった。18世紀になると、衛生と身体的健康への配慮という新たな要素に結びつけられて、子どもは家庭の中に中心的な地位を占めるようになった (Ariès 1960=1973: 128-9)。一方、社交より親密さとアイデンティティの欲求を基軸とした近代の家族への移行に伴って、家族と社会との間に私生活の壁が形成され、子どもを中心とする家族が出現した (Ariès 1960=1973: 386)。

本書のテーマは、『〈子供〉の誕生』と同じく子どもの歴史社会学的研究であるが、著者は「子ども」の概念自体よりも、子どもに関する技術と知識という側面に関心を持っている。従来の研究とは違い、彼は「ノーマルな」子どもという技術的な概念を切り口として、子どもを観察・測定・評価する技術によって結びつけられる「子どもをめぐる集合体」の形成を考察する。アリエスの研究と比べると、本書の特徴は、まなざしなどの主観的なものではなく、物質的な技術と知識および子どもをめぐる具体的な実践を研究対象としている点にある。

アリエスの研究は、家族および学校という子どもにとっての環境、つまり子どもが所属する社会組織または社会的空間を中心的な対象としている。キー概念としての「子どもへのまなざし」および「家族構造」も、子どもを受動的な地位に置いている。本書は、ANTの「対称性」と「技術の媒介」という考えに基づいて、大人と子どもの、または大人間のヒエラルキーという枠組みをとらず、子どもを諸アクターの関連の中に置き、その関連を成立させる上で技術が果たす役割を考察している。

3-2 近代社会における歴史研究の意義

本書が扱う19世紀後半から20世紀前半までの百年間は、アリエスが対象とした15世紀から19世紀とは違い、産業化が順調に進んでおり、急激な社会変動を経験していない時代である。科学と技術の側面では、視覚化と数量化が西ヨーロッパの都市部を中心に新しい文化として出現した。思考が目に見えるイメージで表されるようになり、いかなる概念もまず目に見える形で表現されなくては、人々の心に強く訴えられなくなった (Crosby 1997=2003: 173, 176)。20世紀の初めには、相関や回帰といった統計学の基礎概念も十分に成熟していて、普遍的に受け入れられた。社会的な面では、国民国家による社会および国民生活の管理と規制ももはや珍しくなく、むしろ主流な思想になっていた。社会全体が合理化された時代であった。家庭では、前述のように、18世紀になって子どもの衛生と身体的健康が親の関心の的になった。本書が考察している時代においては、この状況はもは

や西ヨーロッパの文化になったのである。

つまり、本書が考察する時代の状況は、いま我々が暮らしている時代のそれに近い。それに対して、アリエスの研究が扱っていた時代は、中世から近代への移行に伴って、家族構造と社会構造が急激に変動した時代であった。

4 おわりに

本書は、詳細な資料を十分に用い、19世紀中葉からの百年の間に「ノーマルな」子どもの概念が形成される過程を整理している。子どもの社会学的研究や技術の社会史の研究者にとって、彼の研究は大きな価値を持っており、きわめて参考になる。

参考文献

- Ariès, Philippe, 1960, *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*, Paris: Éditions du Seuil. (= 1980, 杉山光信訳『〈子供〉の誕生』みすず書房.)
- Crosby, Alfred W., 1997, *The Measure of Reality: Qualification and Western Society*, New York: Cambridge University Press. (= 2003, 小沢千重子訳『数量化革命——ヨーロッパ覇権をもたらした世界観の誕生』紀伊国屋書店.)
- Latour, Bruno, 1999, *Pandora's Hope*, Massachusetts: Harvard University Press. (= 2007, 川崎勝・平川秀幸訳『科学論の実在——パンドラの希望』産業図書株式会社.)

(ヤオ イウエ・修士課程)